



PERMANENT VACATION

Produced by Bruce Fairbairn
 Engineered by Mike Fraser and Bob Mack
 Assistant Engineer: Ken Lomas
 Mixed by Mike Fraser
 Recorded at Little Mountain Sound Studios,
 Vancouver, B.C., Canada (March - May 1987)
 Additional Musicians:
 Organ on "Rag Doll": Jim Vallance
 Mellotron on "Angel": Drew Arnett
 Horns on "Dude (Looks Like a Lady)"
 and "Rag Doll"
 The Marguerita Horns Arranged by Tom
 Keenlyside
 Tenor Sax and Clarinet: Tom Keenlyside
 Baritone Sax: Ian Putz
 Trombone: Bob Rogers
 Trumpet: Henry Christian and Bruce Fairbairn

GET A GRIP

Produced by Bruce Fairbairn
 Mixed by Brendan O'Brien at
 Can-Am Studios, Tarzana, CA
 Engineered by - David
 Thoenen and Ken Lomas
 Second Engineers: Mike
 Platnickoff, - Ed Kereaga,
 -John "Geedie" Agudo
 Recorded at Little Mountain
 Sound Studios, Vancouver,
 B.C., Canada (September -
 November 1992) and at -A&M Studios, Los Angeles,
 CA (January - February 1992)



PUMP

Produced by Bruce Fairbairn
 Engineered by Mike Fraser
 Second Engineer: Ken Lomas
 Mixed by Mike Fraser
 Recorded at Little Mountain Sound Studios,
 Vancouver, B.C., Canada (April - June 1989)
 Additional Musicians:
 Background Vocals on "Love in an Elevator": Tom
 Hamilton, Joe Perry, Bob Dowd, Bruce Fairbairn
 Elevator Operator on "Love in an Elevator":
 Catherine Eggs
 Keyboards: John Webster
 The Marguerita Horns—
 Tenor Sax and Clarinet: Tom Keenlyside
 Baritone Sax: Ian Putz
 Trumpet: Henry Christian and Bruce Fairbairn



Additional Musicians:

Keyboards on "Amazing": Richie Supa
 Background Vocals on "Amazing": Don Henley
 Keyboards on "Crazy": Desmond Child
 The Marguerita Horns—
 Sax: Tom Keenlyside
 Baritone Sax: Ian Putz
 Trombone: Bob Rogers
 Trumpet: Paul Baron and Bruce Fairbairn
 Polynesian Log Drums on "Eat the Rich": Mapuhi
 T, Tekurio, Melvin Luifau, Wesley Mamea,
 Lialinala Yagaloa, Sandy Kahaehoa, Aladd
 Alinala Teofilo, Jr. Arranged by S. Tyler

- 1 Walk On Water *
- 2 Love in an Elevator *
- 3 Rag Doll
- 4 Who's It Takes
- 5 Dude (Looks Like a Lady)
- 6 Don't Give Up on Me
- 7 Crazy
- 8 Amazing
- 9 Eat the Rich
- 10 Don't Give Up on Me
- 11 The Other Side
- 12 Angel
- 13 Eat the Rich
- 14 Angel
- 15 Live in the Edge
- 16 Dude (Looks Like a Lady) *

Sleeven Tyler: Lead Vocals, Keyboards, Mandolin, Harmonica
 Joe Perry: Guitars, Duet/Chorus, Background Vocals
 Brad Whitford: Guitars
 Tom Hamilton: Electric Bass
 Jerry Kramer: Drums, Percussion

Produced by Bruce Fairbairn
 * Produced by Michael Beinhorn

John Kalodner: John Kalodner
 Management by Collins Management, Inc./Tim Collins
 Collins Management Staff: Keith Garde, Rob Falk, Tim McGrath, Katie
 Lutzke, John Bonello, Sandra Piccione, Steve Martino, Mike Terpe.
 Shirley Womack
 Mastered by George Marino at Sterling Sound, New York
 Mastering Supervisor: David J. Donnelly
 Album Coordination: Leslie Gungo, Debra Shatman
 Assisted by Brian Nicks
 Design: Warner Bros.
 Photography: FPG International, Steve Gardner, Norman Szeft
 Business Manager: Burt Goldstein/Burton Goldstein and Company
 Booking Agent: Dan Weiner/Montarrey Peninsula Artists
 Merchandising: Peter Lubin/Giant Merchandising

"Dudes Are Wild"
 Produced by Bruce Fairbairn
 Engineered by Mike Fraser
 Second Engineer: Ken Lomas
 Mixed by Michael Beinhorn
 From the album THE BEAVIS AND BUDT-HEAD EXPERIENCE
 Recorded at Little Mountain Sound Studios, Vancouver, B.C., Canada (May 1999)

"Walk On Water" and "Good Man"
 Produced by Michael Beinhorn
 Mixed by Mike Fraser
 Engineered by Arlen Kasper
 Second Engineer: Chris Albert (Power Station), and Max Canola (Capri)
 Recorded at Power Station, New York (April 1994) and
 at Capri Digital Studios, The Isle of Capri, Italy (June 1994)

"Dude (Looks Like a Lady)" (Live)
 Mobile Recorded by Westwood One
 Mobile Recorded by Engineered and
 Mobile Recorded by Engineered by Bill Dewes
 Mixed by Brendan O'Brien
 Recorded at San Diego Sports Arena,
 San Diego, CA (August, 1992)
 Tom Keenlyside appears courtesy of Zebra Records/MCA Records, Inc.
 Drew Arnett appears courtesy of Concord Records

Aerosmith Tour Staff
 Tour Manager: James Eggs
 Head Of Security: Andrew Saporito
 Assistant Tour Manager: Baker Berkens
 Tour Assistant: Trent Thomas
 Production Manager: Jerry Goleston
 Production Assistant: Julie Patterson
 Tour Schedulers: Barry Lichten
 Drum Tech/Crew Chief: Andy Gilman (The Prince of Astoria)
 Soundmen: Jim "Bubba" Swartz, Frank Felder and Steve Dixon
 House Sound: Neville Elson
 Soundman: Stu Maslov
 Lights: Will Fook
 VARI-LITE: Sir Swander
 Scaffolds: Arlen Amato
 Security: Mike Henry
 Live Sax, Keyboards and Background Vocals: Thom Gimbel
 SPECIAL THANKS TO GREENPLACE FROM US AND OUR PLANET



MYCO-182
©1975-1988

BIG ONES AEROSMITH

ビッグ・ワンズ / エアロスミス

1. ウォーター・オン・ウォーター / WALK ON WATER (Type - Perry - Blake - Reed) 4:56
2. エレベーター・ラグ / GO IN AN ELEVATOR (Type - Perry) 5:21
3. ラグ・ドール / RAG DOLL (Type - Perry - Valance - Knight) 4:24
4. ホワット・イット・テイクス / WHAT IT TAKES (Type - Perry - Camp) 5:10
5. デュード / DUDE LOOKS LIKE A LADY (Type - Perry - Camp) 4:24
6. ジェイムズ・ガット・ア・ガール / JAMES GOT A GIRL (Type - Neilson) 5:20
7. クライン / KRYM (Type - Perry - Blake) 5:09
8. アメイジング / AMAZING (Type - Reed) 5:56
9. ブラインド・マン / BLIND MAN (Type - Perry - Blake) 4:00
10. デューズ・アー・ワイルド / DRUCKS ARE WILD (Type - Valance) 3:35
11. アザー・サイド / THE OTHER SIDE (Type - Valance) 4:04
12. クレイジー / CRAZY (Type - Perry - Camp) 5:16
13. イート・ザ・リッチ / EAT THE RICH (Type - Perry - Valance) 4:10
14. エンジェル / ANGEL (Type - Camp) 5:07
15. リヴィング・オン・ジ・エッジ / LIVE ON THE EDGE (Type - Perry - Neilson) 6:20
16. デュード / DUDE LOOKS LIKE A LADY (See Track 5) (Type - Perry - Camp) 5:13

* 20-713-1827

- 1, 7 Produced by Michael Beinhorn/Mixed by Mike Freese
- 2-4, 21, 24 Produced by Bruce Fairbairn/Mixed by Mike Freese
- 5, 6, 8, 11, 14, 15 Produced by Bruce Fairbairn/Mixed by Brendan O'Brien
- 9 Mobile Recording by Westwood One/Mixed by Brendan O'Brien

発売から月日は流れたが、アルバム『DET A GIMP』が最も続ける曲までいふあたりはさきかみ買えることなく、むしろ必然として増補しながら多くの新曲がファンに影響を与え続けているように感じる。新作は時間という壁を越えて世代から世代へと語り継がれていくが、『DET A GIMP』の影響方は永遠に続いていくだけの広範囲なパワーを持っている。それは、AEROSMITHが生き続けながら、さらに進化しているという驚異的な事実を無視ではない。彼らは民衆を、開拓者としての生き方を放棄することなく、むしろ、年輪を重ねることにネガティブなその影響をなすりつけて、時代の開拓に風穴を開けながら、次々に新しいファン層を開拓し続けてきた。「あのバンド、あのアルバムは違ってたね」とその過去を回顧し美化されるのではなく、バンドも、ファンも常に進化と変革に絶えず向き、ファンと共に時代と併走しながら進

化し続けていくという普遍的性質を見出すわけにはいかない。デビュー以来、まあ一時期オライオン等の明確な傘下になった時代もあるが、彼らは一直したメジャーを傷もつけ、曲調一變に自分達の好きな曲だけを歌ってきた。時代の風やシーンの流行に全く対応されなかったときも、もはや「冒険」の次で知られるべき生き方を貫いているのである。

そのAEROSMITHが物半端な曲の新曲録音は存在感して来たゲイムをやることになり、レーベル所属の偉大感としてベスト・アルバムとライブ・アルバムの方針を企画していると言われていた。その中の1枚であるベスト・アルバム『BIG ONES』がきっかけにリリィスされることになった。興味深いのは、ドラッグやアルコールの問題に絶えず向け、オライオン・メンバーによって歌われた。いわば、3度目のデビュー・アルバムとなった初年制作の『DONE WITH MENACE』

から1曲も選ばれていないことである。確かにAEROSMITHの傑作を決定的にする曲集の候補とは無縁だったが、「復活」の象徴けとなったという意味では、実に重要な節目となったアルバムだった。定額主 両者とはまではいかなくとも、AEROSMITHの編成に在るまでのこの辺りの史料は全く、例えば、復活AEROSMITHの名前を決定時にした『PERMANENT VACATION』にしても、苦しまぎれに『The Down』といったリリィス一冊を収録したことに対して、今でも機会がある度に自己反省をするなど、彼らは自身の作品に対して真しく対峙してきた。そんな彼らにとっては『DONE WITH MENACE』はもめられない作品だったのだろう。彼らのこの辺りの史料からすれば、『PERMANENT VACATION』から復活の真の嵐よりは遅まったということになるのだから。この『BIG ONES』の選曲は無言のうちにもその論へしているようにも思える。

AEROSMITHは過去にもベスト・アルバムを発表しているし、コロニア時代の偉大感とも評するリリィス『MANX RAYS BOX』では貴重な選曲でファン層の歴史を語っている。しかし、この『BIG ONES』はまた違った意味合いを持っているのである。彼にも述べたようにAEROSMITHは開拓者である。『DET A GIMP』で新曲がこぼれ、8月から5月にかけての大規模な日本公演で発見されたと新しいファン層は人文学的な数になる。ある種の草創期的存在となったAEROSMITHというバンドは、その長い活動期から、新しいファン層にとっては常に身近な存在でありながら奥の深いバンドとしての存在で認識されている。『BIG ONES』や『PERMANENT VACATION』、『LUMP』、『DET A GIMP』の3枚のアルバムから選曲され、しかも、シングル・セレクトを中心に構成されていることから、「AEROSMITHとはー」の豪華なテーマ

に対する賞に分かり易い形式の賞状がここに掲載されているとも言えるのである。アリス・マスのホリデー・シーズンに向けて毎年数多くの企画物が発売されるが、この「BIG ONES」は時間的にも、入門者にとっても、真にタイムリーなベスト・アルバムになった。ほとんどの曲が元来の日本公演で披露されたAEROSMITHの代表曲である。在籍員の彼らの歌ってきた曲のりを知る絶好のベスト・アルバムだといえるだろう。

注目すべきは2曲の新曲だ。しかも、この2曲をプロデュースしたのはマイケル・ベインマンというのがなかなか興味深い。彼は SCENE & AUDIENCE の製作ディレクター SHERMAN、や RED HOT CHILI PEPPERS、SOUL ASYLUM のアルバムに関与してきた人物として知られているが、マイケルの起用に関してスティーヴン・タイラーは「彼達は皆に新しいことに挑戦していくバンドなんだ」と語って

いる。実はこの「Walk On Water」(「Red Man」)の主題は日本公演直前にニューヨークでレコーディングされ、日本公演直前にイタリアで仕上げられている。真にAEROSMITHらしいスウィング感を伝える曲である。また、「Devils Are Wild」はMTVの人気アニメ、ゼー・バイス・オブ・トットリに挿入されたアルバム「TRICK OR TREAT AND BUTT-HEAD EXPERIENCE」に収録した曲として知られている。

AEROSMITHがシングル・ヒットを連発して曲を書くよりなバンドではないことは知っての通りだが、結果的に多くのシングル・ヒットを飛ばして来たことをこの「BIG ONES」は如実に物語っている。いい曲を作り続けて来たAEROSMITHは、ライブ・パフォーマンスでロック・ロールの醍醐味を徹底的に披露し、バンドのイメージやヴォジュアブル戦略といった楽しみ知らずのシャッペン・ビジネスの手段とは一線を画した、言わば、真に音

乐的な方法論で工面を積み重ねて来たバンドだった。その範囲さと、こだわりの曲もだが、「BIG ONES」に収録されている名曲の数々から読み取ってくるのが、ライナー・ノベラーのソングライター・チームの偉大さ。そして、5人の男達の個性の誇り。さらには、少年のようなロックに対する純粋な気持ちと、様々なテーマが「BIG ONES」の中に託入されている。

AEROSMITHはライブ・アルバムを発売した後にザ・ローズ・アルバムを制作する予定だと噂されている。アメリカで今話題になっているクラブ「House Of Blues」の1人前のオープニング・イベントでプレイしたりと、彼らは自らの音楽のキー・ポイントであるブルーズに対する深い敬意の気持ちを具現化しようとしている。この情熱がAEROSMITHというバンドを支えているのである。彼らの人生は真なるロック・ロールの音楽行旅でもあ

る。アルコールやドラッグでゼロゼロになり、バンドとして絶頂の巔を見てきた男達は、厳密な復活で自身のジョージ・シモンとしての役割を再認識し、音楽者として、悪魔者として、21世紀に向かって力強く前進しようとしている。その活動の一つの節目としての「BIG ONES」を聴きながら、日本中の多くのファンがAEROSMITHの偉大さを改めて実感することになるだろう。

[1999.9.22 伊藤政典/MASA-ITCH]

マシュー・ジョン・マシュー

マシュー・ジョン

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

マ

なぞと、なぞで運命がわかれぬま
のオビ— オビ— オビ—

なぞと、なぞ、なぞ、なぞと
運命が運命って、この世の中
でもその運命がわかれぬま
運命の運命がわかれぬま

運命が運命の運命に
こんな世の中なら、と運命が
でも運命の運命、運命が

オビ—
なぞと、なぞ、なぞ、なぞと
運命が運命って、この世の中
でもその運命がわかれぬま

運命が運命って、この世の中
運命が運命って、この世の中
運命が運命って、この世の中

運命の運命が運命が運命であるなら
運命の運命が運命が運命であるなら

オビ—
運命の、運命の、運命の、運命の
運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の

運命の運命の運命、運命の
運命の運命、運命の
運命の運命の運命の運命の

なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が

運命の運命の運命、運命の
運命の運命、運命の

運命の運命の運命の運命の運命の

なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が
なぞと、なぞを運命が運命が運命が

運命の運命、運命の運命を運命の運命の
運命の運命、運命の運命を運命の運命の
運命の運命、運命の運命を運命の運命の
運命の運命、運命の運命を運命の運命の

オビ—
運命の運命の、運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の

オビ—
運命の、運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の

運命の運命の運命の
運命の運命の運命の

●オビ—の運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の

日本版!
EPOCHS-47 Years of Fun Club
まだ今も運命の運命!

運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の

オビ—

運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の
運命の運命の運命の運命の運命の

運命の運命の運命の運命の運命の